毎に異なる内容となり、その記録は残っていないが、毎学期末に三週間の期間を設けて競技を実施したことは記録によって確かめられる。その間、臨時の風景競技も実施された。それは大正十五年十月二十五日より二週間、三年生（方面随意）と二年生（海を採り入れた風景）のみの競技であった。

㈡西洋画科の競技

西洋画科の競技は毎学期末に二週間実施された。内容に関しては左記のような記録が断片的に保存されている。

第一學期西洋畫科實習競技掲示案

來ル六月十六日（月）ヨリ同廿八日（土）マデ二週間左ノ競技ヲ課ス

第一年　石膏胸像　木炭画二枚
第二年　女子全身　木炭画二枚
第三年　女子胸像　油画十五号
第四年　女子半身　油画二十号
第五年　女子全身　油画廿五号

大正十三年五月廿九日　㊞〔西洋畫科〕

大正十五年六月第一学期競技以降の記録には第五年生に関する記載がなく、したがって第五年生の競技は行わなかったと考えられるが、いつから廃止されたか定かでない。なお、同科の競技は第一年生を除いて全て女性モデルによる制作であり、モデルの状態に左右されることもあった。左記の記録（前掲書類）がそれを示す。

當科第二學期競技中岡田教授受持教室第四年ハ「モデル」缺勤ノ為メ成績未完了ニシテ他教室ト共ニ之ヲ採點スルヲ得ズ　依テ来學期始業ト共ニ更ニ改メテ競技ヲ課スルコトニ相成左ノ如ク掲示致度候間此段御届申候也

大正十四年十二月十五日

右掲示案

岡田教授受持教室第四年

来年一月十一日（月）ヨリ同廿三日（土）マデ二週間左ノ競技ヲ課ス

女子全身　油画（海面廿五号）

年　月　日

## ⑩ 現代の図案工芸社主催第一回工芸展

帝展第四部が実現しないまま、大正十二年を迎えたが、四月には現代の図案工芸社が工芸展覧会を開催した。広告に「一つの自由な、信念の壇場を創めたのに外ならないのであります、これで本當の日本の工藝及工藝の力を、より良く民衆の生活と、人類の情に直摂の握手をさせたいとおもひます」「真に、藝術文化の使命は、美術が工藝の世紀として實を結ぶところにある」とあり、委員、顧問、審査員に本校関係者の名前が多く見られる。

現代の圖按工藝社主催第一回工藝展

農展振はず工藝部編入が（ど）とうやらお流れになりさうな帝展で期待を裏切られた新興工藝美術界の爲め現代の圖按工藝社が催主とな

り新進作家の自由發表壇場とすべく第一回工藝展を四月二日から七日迄三越で開催と決定◇第一回展覽會委員を高村豐周、藤井達吉、廣川松五郎、鈴木古拙、渡邊素舟の五名とし審査員は出品者の自由投票とし七日美術學校倶樂部で行はれた◇尚ほ顧問に岡田三郎助、神坂雪佳、武田伍一、塚本靖、中澤岩太、〔正〕道木直彦、松岡壽、佐藤功一の八氏を頂き陶、漆器、金工、染織刺繡、木工、革製品等創作一切を來る三十日迄三越内同會で受附け出陳品中の秀作に對し奬勵賞を授與する計畫もある由

（大正十二年三月九日『読売新聞』）

工藝展覽會の審査員が決定

現代の圖案工藝社が主催で四月二日から一週間三越に開く官僚に無關係な第一回工藝展の審査員は重な作家百名の一般投票に依つ〔士ロ〕て次の十八氏と決した◇迫田秋悅◇戸島光孚◇赤塚自得◇石井吉◇六角紫水（以上漆器）◇澤田宗山◇富本憲吉◇板谷波山◇河合卯之助◇河井寛次郎（以上陶器）◇高村豐周◇香取秀眞◇鈴木古拙◇山本安曇◇西村敏彥（以上金工）◇藤井達吉◇廣川松五郎◇山鹿清華（以上織物刺繡）尚ほ木工は山本鼎、森谷延雄、西村伊作、藤井達吉の四氏に各一票あつただけであるがどうするのか

（大正十二年三月二十五日『読売新聞』）